

又云、南無成就須彌功德王如來

〔袋草紙^四〕一誦文歌

吉備大臣夢違誦文歌

あらしをのかるやのさきにたつしかもちがへをすればちがふとぞきく

〔比古婆衣^七〕鹿のちがへ

阿留多伎貞樹が、おのれ信友がもとに來かよひて、物かたらふちなみに語りけらく、中鹿の

獵人に遭たる時、此方に向きて、前足をやりちがへてつき立て見おこせてある事を、ちがへを

すといふなり、中といへり、中さてかのちがへの歌、吉備大臣を夢違の歌といへるは、相

夢に凶を吉に轉ふるやうのことを、ちがふるといふに、註其を鹿のちがへをするにそへて、

兎餓野の鹿の相夢の古事に、とりあはせて作れる歌と聞えたり、

〔閑窓自語〕呪厭凶夢丑未札事

いま春日の御やしろ、廻廊みづがきのあたりに、丑ひつじと紙にかきて、多くおせり、これは奈良の人夢見の心にさはるとき、かきておせば、わざはひをまぬかる、まじなひと、いひつたへてする事なり、御驗記などにもこのまじなひのふだを、繪にうつしてはべれば、ふるき事なるべし、此事春日社にはかざるべからず、御門かたにても、凶夢とおもはん時、このふだをちかきあたりの社にも押すべきなりと、人にもをしへ侍りしなり、

〔相模集〕夢

うきことをいそぎもみせんよと、もにたゞゆめぬしのかみををがまむ

〔殿曆〕天永二年八月六日、丙申主上御料可御夢祭、雖穢内可被行由、陰陽師光平申者也、余今日夢祭

泰長勤之、

夢神

夢祭